

Costume and Textile

No.37

服飾文化学会会報

2019年3月

2019（平成31）年度 第20回服飾文化学会大会のお知らせ

2019（平成31）年度 服飾文化学会 第20回大会を下記のとおり開催いたします。多くの皆様がご参加くださいますようお願い申し上げます。

記

開催日 2019年5月18日（土）・19日（日）

開催校 日本女子大学 目白キャンパス

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

【研究発表】新泉山館1階大会議室

【作品展示】百年館1階ロビー

【自由見学】成瀬記念館

成瀬記念館分館(旧成瀬仁蔵住宅)

1. プログラム

5月18日（土）

13:00～14:05 研究発表

14:15～15:45 特別講演

演題「服飾から物語へ—小説家が紡ぐ服飾作品の言葉をめぐって—」

講師 千早茜氏（小説家）

筒井直子氏（京都服飾文化研究財団(KCI)キュレーター）

15:55～16:25 総会

16:40～18:00 懇親会（桜楓会館3階）

5月19日（日）

9:10～12:10 研究発表

作品・ポスター展示ショートスピーチ

12:10～13:10 昼食

13:10～14:40 作品・ポスター展示説明・質疑応答

（研究発表会場にて）

※作品・ポスター展示期間は、5/18（土）13:00～5/19（日）14:40です。また、ショートスピーチは、研究発表会場で行います。

※成瀬記念館は、18日（土）10時から14時、成瀬記念

館分館（旧成瀬仁蔵住宅）は、18日（土）10時半から13時半に開館いたします。

※発表件数によっては時間変更が生じますので、後日送付しますプログラムのご確認をお願いいたします。

2. 参加費

大会参加費	会員	3,000円
	非会員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円
懇親会費	会員	4,000円
	非会員	4,500円
	学生会員	2,000円
	学生非会員	2,500円
昼食代（5/19）		1,000円

3. 発表・参加申込

（1）発表申込締切日 2019年3月28日（木）

①既にお送りしました「発表者へのお知らせ」（2種）に沿って、第19回大会・総会実行委員（内村理奈）までEメールにてお申込み下さい。（3/28必着）

②発表形式には、口頭発表・ポスター展示・作品展示の3種があります。

③発表は未発表の研究報告で、共同発表者とともに本会会員に限られます。非会員の発表希望者は学会ホームページから入会手続きをお願いいたします。

（2）要旨原稿締切日 2019年4月20日（土）

（提出先：uchimurar@fc.jwu.ac.jp）

①用紙：A4縦置き、横書き、1枚

②余白：上25mm、下30mm、左右30mm

③文字：10.5ポイント、明朝体

（3）参加申込・払込締切日 2019年4月20日（土）

ゆうちょ銀行 振込口座 00110-0-451698

加入者名：内村 理奈（ウチムラリナ）

4. 特別講演

◆講師 千早茜氏 (小説家)

筒井直子氏 (京都服飾文化研究財団 (KCI)
キュレーター)

◆演題 「服飾から物語へ—小説家が紡ぐ服飾作品の 言葉をめぐって—」

◆講演内容

気鋭の小説家、千早茜氏が2018年上梓した『クローゼット』(新潮社)は、京都服飾文化研究財団が収蔵する西洋の服飾作品とそれに携わる補修士、学芸員らの取材をもとにした物語である。本作では登場人物たちの揺れ動く心情と歴史衣装の細かな描写が共鳴しあい、全編にわたり豊かな服飾の世界が展開されている。さらに歴史衣装の傷みや脆さが現代社会の暗喩として表現された点も読みどころの一つとなり、多くの読者を引きつけている。本作で紡がれた服飾作品の表現とはどのようなものなのか。本講演では、千早茜氏と同財団キュレーターが実際の服飾作品の画像とともに、物語で表現された言葉を読み解いていく。

◆講師のプロフィール

千早茜氏

北海道生まれ。立命館大学文学部卒業。2008年、『魚神 (いおがみ)』で第21回小説すばる新人賞を受賞。翌年、同作で泉鏡花文学賞を、2013年に『あとかた』で島清恋愛文学賞を受賞。同年、『あとかた』、2014年に『男ともだち』で直木賞候補となる。近著に『鳥籠の小娘』、『わるい食べもの』、『正しい女たち』、『犬も食わない』(尾崎世界観氏と共著)など。

筒井直子氏

和歌山県生まれ。神戸女子大学大学院博士前期課程修了。現在、京都服飾文化研究財団 (KCI) キュレーター。KCIでは学芸、司書、教育普及を兼務すると共に広報誌『服をめぐる』の編集を担当。モスクワ・クレムリン美術館での「Elegance and Splendour of Art Deco」展等、国内外におけるファッション展の企画に携わる。

5. 自由見学

◆成瀬記念館、成瀬記念館分館 (旧成瀬仁蔵住宅)

◆展示テーマ「日本女子大学の授業」

明治・大正・昭和の授業に使われた教材やノート、写真などが展示される予定です。家政学の資料も展示されます。成瀬記念館分館は、1901 (明治34) 年に教師館 (教師用住宅) の一つとして建設され、創立者で初代校長を務めた成瀬仁蔵が1919 (大正8) 年に没す

るまで居住した、本学創立時から残る唯一の建物です。成瀬没年の状態に復元・修復され、現在の場所に移築されました。分館は靴下をお履きの上、ご見学ください (素足はご遠慮ください)。

6. アクセス

【目白駅】(JR山手線)

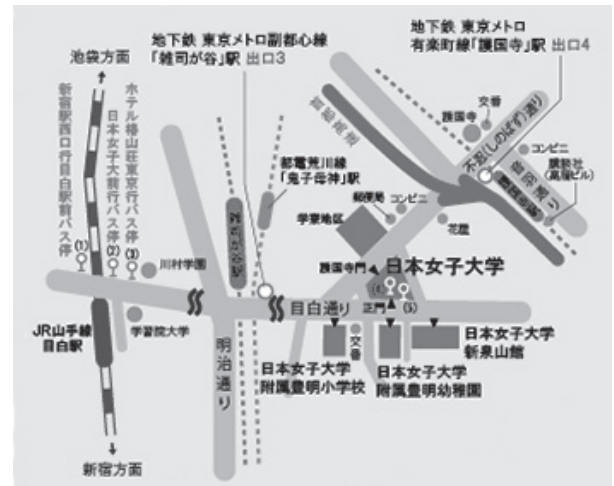
<バスのりば2番>から【都営バス (学05)】日本女子大学前行 (直行)、乗車時間約5分、<バスのりば1番、3番>から【都営バス (白61)】新宿駅西口行きまたはホテル椿山荘東京行き「日本女子大前」下車、乗車時間約5分

【雑司ヶ谷駅】(東京メトロ副都心線)

3番出口より徒歩8分

【護国寺駅】(東京メトロ有楽町線)

4番出口より徒歩10分



7. 連絡先

服飾文化学会 第20回大会・総会実行委員会

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

日本女子大学 服飾美学研究室 内村理奈

uchimurar@fc.jwu.ac.jp tel&fax 03-5981-3485

2019年度 総会のお知らせ

第20回大会において、総会を開催いたします。本学会の発展のために、多数の会員の総会への参加をお願いいたします。正会員の方は、5月1日までに出欠記載の返信はがきを開催校へ返送してください。

日時：2018年5月18日 (土) 15:55~16:25

会場：日本女子大学 新泉山館1階大会議室

議事 (予定)

・平成29年度 事業報告、決算報告、監査報告

・平成30年度 事業計画審議、予算案審議

2018 (平成30) 年度 研究例会の報告

2018年度研究例会は、10月27日(土)に東京都庭園美術館で開催されました。「旧朝香宮邸からアール・デコを再考する」と題して、関昭郎氏(東京都庭園美術館 事業企画係長 学芸員)による講演が行われました。出席者は、学会員と非学会員を合わせて22名でした。ご講演の内容は以下の通りです。(研究例会担当 菅野ももこ)

「旧朝香宮邸からアール・デコを再考する」
関昭郎(東京都庭園美術館 学芸員)

直線と幾何学だけではないアール・デコ

「アール・デコ」の語源となっているのは、1925年にパリで行われた現代装飾美術・産業美術国際博覧会です。その計画を中心的に推し進めたのが、1901年創設の装飾美術家協会でした。

東京都庭園美術館は、昭和8年(1933)に竣工した旧朝香宮邸を展示室として使用していますが、その主要各室の装飾を計画した装飾美術家アンリ・ラパンは、博覧会が行われた当時、同協会の副会長をつとめていました。同協会は、博覧会場が一番奥まった重要な場所に技能館パヴィリオン《フランス大使館》を出展しましたが、この展示の発案者であったラパンはそのハイライトであった大サロンと大食堂を担当しました。

さまざまな装飾美術家たちが参加した仮想の《フランス大使館》のなかには、マレ・ステヴァンによるホールのように、すっきりしたモダニズムの表現も見られましたが、ラパンが手がけたこの二室は、さまざまな分野の美術家、装飾美術家を起用した豪華で、装飾的なものでした。公式報告書も、「しばしば貧困であると責められるフランスの装飾家たちが、ルイ14世時代のアンサンブルと同じほど贅を尽くしたアンサンブルを作り上げることが出来ることを示した」と評価しています。

さて、博覧会の趣旨書は、過去からの模倣については厳しく否定し、「現代性」を求めています。必ずしもそれはただ直線や幾何学を用いることを意味しておらず、ラパンへの評価に見たとおり、豪華さも否定されてはいませんでした。

それでは、アール・デコ博覧会における「現代性」とはどういったものなのでしょうか。私自身は、それを象徴していると考えるのが、建築家ピエール・パトゥーの設計によるコンコルド門です。

門は鉄筋コンクリートで出来た高さ22メートル、幅3.5メートルの8本の柱で構成されています。ギリシアの古代神殿を思わせるそのモニュメンタルな構成と装飾を省き直線を活かした柱は、アカデミー出身の建築家らしい古典主義とモダニズムとの融合です。

また、家具デザインのジャック＝エミール・リュールマンの手法も一つの「現代性」でした。

リュールマンの家具に見られる、細い脚はルイ16世様式の家具に見られる特徴の一つですが、一方で細か

な彫刻による装飾は省略されています。彼は彫刻による装飾に代えて、フラットな面でもルイ16世様式の家具にも負けない豪華さを感じさせるように、特長ある木目の突板を貼り、マルケトリーと呼ばれる色彩の異なった木材によるモザイク、あるいは象牙による象嵌などを施しました。この手法によって、フランスの伝統性と豪華さを保ちながら、現代的な軽快さを表現したのです。

パトゥーとリュールマンは、博覧会におけるまさに主流派であり、彼らの作品には、当時のフランスの人々が望んでいた自らのアイデンティティーを確認できる「現代性」が表現されていました。

アンリ・ラパンも《旧朝香宮邸》において、細かな装飾に代えてウォルナットやシコモールなどの木材の突板や特徴ある石材、そして漆などを使っています。また、イオニア式の柱頭飾りが付けられた付け柱や花手綱が描かれているラパン自身による壁画からも、18世紀の新古典主義を20世紀的に再解釈していることが分かります。

こうした傾向は、アール・デコに直線と幾何学だけの特徴を見ようとするだけでは理解できません。《旧朝香宮邸》が、このことを気づかせてくれました。

異なった社会階層に向けたアール・デコ

今日では、マンハッタンのアール・デコが有名であり、さらにはその特徴が分かりやすいために、「1930年代から、アール・デコの中心はアメリカに移った」、あるいはもっと極端に「パリにはアール・デコはない」とおっしゃる方は少なくありません。

確かに、一般的なアール・デコらしい特徴の外観を持つタイプの建物は、パリの中心部よりも周辺部の住宅地域にあるので、あまり知られていないでしょう。

パリのリング周囲や隣接するブローニュ＝ビヤンクール市のように両大戦間期に拓がった新興住宅地には客船を思わせる外観を持つパトゥーの《ヴィクトール大通りのアパルトマン》(1934)のように、自由で、特徴あるスタイルのコンクリートの住宅が見られます。

また、地方や海外県からの労働者が集まった地域には低賃金住宅(HBM)が作られました。そうした建築も一つのアール・デコの特徴を示していますし、特にこうした新しい住民たちに向けた教会では、鉄筋コンクリートの構造を活かしたそれまでにないかなり大胆なスタイルが試みられました。

中心部の建築でも、例外は、パリの2区や9区のような商業地域には、ミュージック・ホールのフォリー・ベルジュールや映画館レックスがあり、それらのキチュさは一般的なアール・デコのイメージにも合致するでしょうが、数としては多くはありません。

一方で、8区、16区、あるいはセヌ川を挟んだ7区の一部には、アール・デコの時代に建て替えられたアパートマンが残っています。それらはいわゆる特長あるフェロニエール（鉄工芸）の扉があり、それまでの時代の建築とは異なって、ファサードには石の彫刻などの重々しさはありません。ただし、それらは周囲の建物との調和を図った外観を持っているので、見過ごされてしまいがちです。

こうしたアール・デコの建築で、最も特徴的であるのは室内装飾ですが、プライベートな空間を知ることには限界があります。例えば、パリ・イル＝ド＝フランス商工会議所となっているエトワール凱旋門近くのオテル・ポトキなども、1930年代にリュールマンが手がけたアール・デコの素晴らしい空間を持つウイングが加えられましたが、ファサードは19世紀に作られた歴史主義様式のもので、外側からはとてもその内部を想像することはできません。

8区、16区と言えば、パレ・ド・トーキョーとシャイヨー宮と言う1937年の博覧会で建てられたとても重要な建築が残っています。前者は同名の国立現代美術館とパリ市近代美術館が入っています。後者は、エッフェル塔を正面にパリ市街を一望できることから、観光客が必ず一度は訪れるところです。パリを占領したヒットラーも足を運びました。この二つの建築は博覧会のシンボルでもあったため、モニュメンタルなものであることが期待された特徴ある外観を持っています。しかし、当時の人々に驚きを与えた存在も、古典主義的なスタイルとの融合から、今日では不思議と落着いて見えます。

アール・デコにはこういった社会階層に向けたものか、またその目的によって、それぞれ異なったスタイ

ルを持っているのです。世界に伝搬したアール・デコが主に商業地域中心のものであると異なり、特にフランスのアール・デコの作例には、こうした多層性があるということは理解しておく必要があるでしょう。ここでは建築を例にしましたが、それは他の分野でも同じ事が言えると思います。

時代のメンタリティーを読み解く

ニューヨークのアール・デコは、パリで学んだ建築家が関わり、また、ジャン・デュパやエルテラ、パリから渡った美術家がファッション雑誌のイラストレーターとして活躍するなど、フランスからの直接的な移植がありました。国際的には、映像や印刷物などの間接的な情報から、伝搬したアール・デコもありました。朝香宮邸の建造にあたった宮内省匠寮も、雑誌などからその造形的特徴を学んだそうです。

こうした国際的に伝搬したアール・デコの共通項は一見しただけでも分かりやすい造形上の特徴を持っていますが、フランスにおけるアール・デコには既述したように多層性があり、そして一括りにはできない多層性がありました。

ここで言う多層性とは、異なった方法論があったと言うことです。例えば、ポール・ボワレの試みを考えただけでも、古代キトンの引用、「千二夜」のオリエンタリズム、そして、バエレ・リュスと共通するモダニティーを表現する強い色彩、ウィーン工房を手本とした総合芸術の理想など、様々な側面がありました。ボワレは、時代のメンタリティーを敏感に感じ取って、先進性と懐古的な要素、キッチュと正統性、そしてシンプルな色面と手の込んだ装飾的要素を巧みにブレンドしています。

私が2015年の「幻想絶佳：アール・デコと古典主義」展、そして今回の「エキゾティック×モダン アール・デコと異境への眼差し」展で試みていることは、様々なフランスのアール・デコの作例を通して、時代のメンタリティーを読み解くことでした。可能であるならば、第一次世界大戦とモダニズムへの期待をテーマとした展覧会がこれに加わると望ましいのですが、この時代には旧来のものを打ち壊す新しいものへの期待と高揚、それとは逆に秩序や伝統への回帰が共存していたのです。

私自身も1990年代半ばから、特にジュエリーに興味を持ってきましたが、こうした時代のメンタリティーを読むことを目的とした研究には、ファイン・アートより、ファッションを含めた装飾美術の方がモチーフや素材に率直な反映が見られるため理解しやすく、美術史とは異なった視点を気づかせてくれるように思っています。特に両大戦間期のフランスはそのアンビヴァレントなメンタリティーを持っていた故にユニークな作品が数多く生まれ、興味尽きないのです。



会場風景

2018 (平成30) 年度 論文発表会の報告

本年度の論文発表会は、2019年3月1日(金)13時00分より文化学園大学のC071教室にて60余名の参加者をもって開催された。福田副会長より、「今年は修士論文も多く若手研究者が、今日を機に大きく躍進してくれることを祈念する」と開会の辞を述べられた。卒業論文5件、修士論文4件、計9件の発表の概要は以下のプログラム通りである。会の運営は、文化学園大学の皆様の協力により滞りなく進行した。

<プログラム>

開会の辞 副会長：福田 博美 (文化学園大学)

卒業論文

座長 大崎 彩子 (女子美術大学)

1. 共立女子学園所蔵貴重図書による裁縫教育の研究—明治期出版の「女子手芸講義録」を中心に—
古埜 みなみ (共立女子大学)
山岸 麻衣子 (共立女子大学)

座長 大塚 有理 (東京家政大学)

2. 16世紀から17世紀におけるレースの文様表現に関する一考察
空井 佳穂 (大阪樟蔭女子大学)
3. 1900年代のアメリカにおけるアイリッシュ・クロッシェ・レースの受容
—『ヴォーグ (VOGUE) にみる模倣品と女性像』—
三宅 真未 (お茶の水女子大学)

座長 管野 ももこ (女子美術大学)

4. 第二帝政期のリボンの流行と絹リボンの産業
—Petit Courrier des DamesとLa mode illustréeから—
横山 早紀 (日本女子大学)
5. YUKI FUJISAWAのデザイン要素を用いたヴィンテージ風ウェディングドレスの提案—実物製作—
平松 百々花 (文化学園大学)

修士論文

座長 鈴木 桜子 (杉野服飾大学)

1. 20世紀初頭の*Femina*にみられるmodern femininity
—乗馬をする女性と女優の帽子を中心に—
山口 永莉華 (日本女子大学 大学院)
2. ミリタリーファッションからストレスマネジメントを考える
新田 春香 (郡山女子大学 大学院)

座長 中川 麻子 (大妻女子大学)

3. 1880年代におけるリバティ商会のコスチューム部門の設立と衣服の独自性
佐藤 梓 (お茶の水大学 大学院)
4. 近代輸出用染織品に関する研究
—日本での試みと欧米における受容—

篠田 容 (共立女子大学 大学院)

閉会の辞 副会長：大綱 美代子 (大妻女子大学)

最初の卒業論文は、古埜・山岸論文による、共立女子学園所蔵貴重図書による裁縫教育の研究—明治期出版の「女子手芸講義録」を中心に—である。明治時代の教科書の中で裁縫について詳細な記載が見られる、通信教育用の女子手芸講義録全12冊を中心に調査を行い、当時の裁縫教育は和服裁縫科が中心であり、共立女子職業学校の女学生達は、女性が実際生活を営む上で重要と考えられる内容を学んでいたことが報告された。

空井論文は、16世紀から17世紀におけるレースの文様表現に関する一考察で、文献資料および図像資料をもとに、技術や年代などに着目しながらレースの文様を分類・分析した結果、レース工の努力やレースを巡る各国の競争体制が技術向上に影響し、後に続くレースの文様表現の土台となっていることが報告された。またレースの文様は、人物の立場を明確に表現する役割を担っていることを明らかにした。

三宅論文は、1900年代のアメリカにおけるアイリッシュ・クロッシェ・レースの受容—『ヴォーグ (VOGUE) にみる模倣品と女性像』—であった。1900年代を取り上げ、飢饉期には最大の移民先であったアメリカでの受容の実態を明らかにすることを目的としたもので、上流階級の女性たちに、対面を保つための「顕示的消費」と大量消費社会に対応するための「賢明な消費」という二つの姿勢が与えられたことで、『ヴォーグ』はリアル・アイリッシュとイミテーション・アイリッシュという相対する商品を同時に提示できていたことが明らかとなり、当時のアメリカの社会観が感じられる内容であった。

横山論文は、第二帝政期のリボンの流行と絹リボンの産業—Petit Courrier des DamesとLa mode illustréeから—である。ナポレオン三世が統治した1852年から1870年までのフランス第二帝政期におけるリボンの流行と、この時代最盛を迎えたサン・テティエンヌ

地域の絹リボン産業との関連性についての発表であった。ロココ趣味とそれに影響されたモードなどによる文化的要因と、ミシンの改良によって起こった技術革新などによる社会的要因の二つの時代背景とサン・ティエンヌでは、流動性と分散性を持つアトリエ親方制をとっていた為、需要の変化に対応することができたことから、生産額は長期的に増加していったという報告がされた。

最後の平松論文は、YUKI FUJISAWAのデザイン要素を用いたヴィンテージ風ウェディングドレスの提案—実物製作—であった。YUKI FUJISAWAのブランドデザイン特徴を明確にし、本人へのインタビュー調査により商品へのポリシーなども明らかにした。それらをもとに、70年代ドレスのハイウエストのフィットアンドフレアシルエットでレースやサテンの素材感を活かした作品制作ができた。さらに実物作品とブランド商品とのイメージ調査では、「女性的」「繊細」というイメージの共通点が得られ、ヴィンテージ風ウェディングドレスの表現ができたと報告された。

10分の休憩をはさみ、最初の修士論文は、山口論文による20世紀初頭の*Femina*にみられるmodern femininity—女性の帽子を中心に—である。20世紀初頭の女性の帽子は、男女の要素の中間をいく先駆的な存在であった。女優やアマゾンヌの影響が大きく関わっており、彼女たちの身に着ける男性的な帽子は女性のモードにも取り入れられており、上層ブルジョワ階級の女性の間では、modern femininityを表現するに最もふさわしい服飾であり、同時代の女性の帽子の流行を形成していったことが明らかとなる内容であった。

新田論文は、ミリタリーファッションからストレスマネジメントを考えるであった。ミリタリーファッションに限定した時、着用上の快・不快及び視覚による快・不快についてストレスマネジメントの必要性は高くないという結果となった。衣服によってストレスがもたらされることは言うまでもなく、今後は、衣服におけるストレスをマネジメントする手法を構築提案することが必要であると報告され、今後が期待される内容であった。

佐藤論文は、1880年代におけるリバティ商会のコスチューム部門の設立と衣服の独自性であった。直接的にその運営に関わったとされる1880年代に着目し、彼らの服飾に対する意識について調査をした。続いてリバティ商会のカタログや女性雑誌の記事を通して、商品がどのように販売、宣伝されているかを考察した結

果、色彩や質感にこだわりを見せた布地から衣服を製作し、古代ギリシャなど過去の時代の衣装を当世風の装いと組み合わせることで、理想的な商品として販売されていたことが報告された。

終わりは、篠田論文による、近代輸出用染織品に関する研究—日本での試みと欧米における受容—であった。輸出用染織品の発生と展開から、受容と衰退に至るまでの経緯を明らかにするために、国内外の双方からこれらを示す文献資料を中心に情報を収集し、調査と考察を行った結果、輸出用染織品は、貿易開始時期と交易地による影響を受け、日本らしさを感じさせるために染織図案に日本画家を起用するなど、欧米のニーズに対応してきたが、日本の染織品が高価なため安価品が持てはやされたこと、また日本染織品への憧れに陰りが見えてきたことが衰退の要因であることが明らかとなった。

以上9件の発表は、国内外を問わず、多岐にわたる研究であった。あらためて服飾は様々な文化的要因、社会的要因との関わりが深く、その背景の探究が必須であると感じられた。大綱副会長より、個々に丁寧な好評を頂き、「研究を構築した後には発信していくことも大変重要であり、これからに期待する」と閉会の辞を述べられた。



発表者 集合写真

情報交換会

発表会終了後、Bun Caféにて、40余名の参加者で開催された。司会は、論文発表会担当の水谷理事が務めた。能澤先生の乾杯の発声で始まり、歓談とともに交流を深めた。最後に長崎会長より、「若手研究者へのこれからの健闘と服飾文化学会のますますの発展を祈念する」とご挨拶を頂き盛会のうちに散会となった。今回、学生たちに発表を促してくださり、ご指導頂いた先生方に御礼を申し上げます。

(論文発表会担当 伊藤瑞香)

特集記事 書籍『歴史のなかの異性装』紹介

新實 五穂（お茶の水女子大学）



服藤早苗・新實五穂
編著
勉誠出版
2017年6月発行

『聖書』の「申命記」第22章には、「女は男の着物を着てはならない。また男は女の着物を着てはならない。あなたの神、主はそのような事をする者を忌みさらわれるからである」と明記されている。この文言を拠りどころとして、キリスト教を信仰する国や地域では異性装は好ましくない行為であり、性の混同は恐怖であると長らく考えてきた。またフランスでは、1800年11月7日に異性装に関する警察令が発令されている。同法令は乗馬をしたり、自転車に乗る女性たちが増え、ズボンが女性たちに活用されるようになる、20世紀初頭に緩和された。しかしながら、ほぼ19世紀の初めから終わりまで続いていた警察による法令で、健康上の理由から医者に特別な許可を得た場合以外、女性が異性装をすることは禁止され、違反者は逮捕、警察へ連行されるといった内容であった。1793年10月29日の法令によって、フランスではあくまで性別に適合した範囲であったものの、着衣行為の自由を広く認める法令が発令された事実を考慮すると、階級間の着衣行為による差は廃絶を目指しても、ジェンダーにまつわる着衣行為の混同には寛容にはなれなかったことが推察される。いずれにせよ、警察令の取り締まりの対象として女性に焦点が絞られた結果、女性が男性の身分と男性にまつわる権利や権威を奪い取る行為をとくに禁じ、女性のアイデンティティを社会的にコントロールしようとする狙いが法令に付託された。この警

察令の存在ゆえに、ヨーロッパの国々と比較して、フランスは女性による異性装に対してとりわけ厳格であったことが指摘されている。さらにヨーロッパで行われてきた異性装の動機に注目すると、男性の事例は性的衝動に、女性の事例は社会的・経済的な理由に結び付けられやすい傾向にあり、加えて男性の場合は断続的で、女性は永続的であると言われている。

では、ヨーロッパはもとより、日本を含むアジア地域では、異性装という行為はどのように受容され、いかなる社会・文化を表象してきたのだろうか。そもそも西欧服飾の史的事象をジェンダー分析することに取り組んできた著者は、服飾の形状および理想とされる美しさなどの面から、アジア地域の方が欧米よりも異性装という行為に寛大で、理解があると感じてきた。そのような点からも、多様な事例を比較検討することで、異性装をめぐる社会・文化的背景がいつそう明確になると考えた。加えて、異性装に関する研究はジェンダー研究が盛んになっていく1970年代以降、空間や時間を限定して事例研究を積み上げてきたものの、学問分野の枠を超えて、分野横断的な成果につながるものがこれまで少な過ぎたように思われる。

本書は多様な国や時代の事例を比較検討することで、異性装を通して見える社会や文化の在り様を詳らかにすることを目的としている。歴史・美術・演劇・服飾などに基づいた18本の論考からなる本書を通して、多彩な異性装の実態が浮き彫りとなろう。本書の構成は以下の通りである。第1部「日本」は6本の論文と1本のコラム、第2部「アジア」は中国や韓国、インド、タイなどの6本の論文、第3部「ヨーロッパ・アフリカ」はイギリスやドイツ、フランスなどの5本の論文が掲載されている。ただし、本書がすべての地域や時代を完全に網羅できたわけではないことを断っておかねばならない。たとえば、アメリカやイスラム地域などの研究対象を取りこぼし、ヨーロッパ地域が西欧に偏ってしまったことは、今後の課題の一つとして挙げられる。けれども、日本やアジア地域を中心としつつも、ヨーロッパやアフリカなどに関する論考も掲載され、アジアと他の地域との連関を考える上

で示唆に富むものが集まったことは確かである。本書をきっかけに、異性装研究ならびに服飾におけるジェンダー研究に関心を持つ人々が増え、性の多様性の文化表象である異性装という行為について調査する裾野が少しずつ広がっていけば、嬉しく思う。さらに著者自身も、従来の異性装に関する研究から零れ落ち、見落とされている動機について引き続き検討し、できるだけ多くの異性装の動機を明らかにしていきたいと考えている。性の形が多様であるならば、性を最も象徴してきた着衣行為の在り方も多彩で、豊かであるはずである。

***** 学会誌の改訂について *****

学会創設から「服飾文化学会誌」として継続してきました本学会誌を平成31年3月発行号より改訂致します。「服飾学研究」(Journal of Costume and Textile)第1巻、第1号として、これまでの論文編と作品編を合本した形で編纂し、A4判となります。表紙は理事の中川麻子先生のデザイン、タイトル英文字は石山彰先生の文字を継承致しました。

今年度はJ-STAGE申請書提出まで進み、次年度はJ-STAGEでオンライン公開するまで準備を進めます。これにより、掲載論文がデータ公開される利点があるだけでなく、今後は論文投稿、査読の過程もJ-STAGEを活用して効率化をはかることが可能となります。これに合わせて、投稿時の要領も適宜見直して参ります。

なお、学会ホームページにある学会誌の投稿規定、執筆要領、投稿カードを、学会の総会後に更新しておりますので、投稿される場合には必ずご参照下さい。

(学会誌編集委員 玉田真紀)

***** 事務局より *****

●新入会員 (敬称略 申し込み順)

正会員

森 眸 美 (文化学園大学)
八 浪 美 穂 (文化学園大学)
横 田 香野子 (文化学園大学)
真 殿 由加里 (大阪樟蔭女子大学)

***** 夏期セミナーのお知らせ *****

第20回となる2019年度夏期セミナーは、2019年8月20日(火)～22日(木)の2泊3日の日程で、フランスのパリを基点にノルマンディー地方にて開催いたします。

1日目はパリを出発し、パリ近郊のMusée de la Toile de Jouyを見学後、ノルマンディー公国の首都として栄えた街ルーアン(Rouen)へと向かいます。懇親会は、ルーアンにあるフランス最古のオペラージュ「La Couronne」を予定しています。2日目はBayeux Museumのタペストリーを見学し、クリスチャン・ディオールの生誕地、グランヴィル(Granville)に向かい、ディオールの生家を使用したMusée et jardin Christian DIORを見学します。3日目はレースで有名なアランソンでMusée des Beaux-arts et de la Dentelleを訪問し、パリへと戻る2泊3日の日程です。フランスを代表するテキスタイルとクリスチャン・ディオール美術館など、通常ではなかなか行けない場所を巡ります。

◇◇◇◇◇ 展覧会のお知らせ ◇◇◇◇◇

■「ヨーロッパ・モード」

概要：宮廷が流行を生み出した18世紀のロココ時代から、産業の発達や社会の成熟とともに変化する19世紀を経て、若者や大衆が流行の担い手となった20世紀末まで、ヨーロッパを発信元とする約250年の女性モードの変遷を、その社会背景とともに紹介します。

会場：文化学園服飾博物館

期間：2019年3月11日(月)～5月17日(金)

開館時間：10時～16時30分(4月19日、5月10日は19時まで、入館は閉館の30分前まで)

休館日：日曜、祝日、4月28日～5月6日

会報 No.37：2019(平成31)年3月31日発行
編集発行人：服飾文化学会
事務局：101-8437 東京都千代田区一橋2-2-1
共立女子大学 被服平面造形研究室
TEL：03-3237-2463
E-mail：fukubunjim@gmail.com
URL：http://www.fukusyoku-bunka-gakkai.jp